五都市（上海・南通・揚州・鎮江・無錫）周遊（1）

寺西 俊英

５月に、友人から誘いがあった「上海・南通・揚州・鎮江・無錫　歴史名勝、グルメ５日間」のツアーに参加した。日程表を見ると５日間をフルに使うためか、羽田発８時40分発のMU（中国東方航空）756便で行くことになっていた。

５月20日、指定された６時40分の集合時間に間に合わせるため、朝３時半過ぎに起床。同行したKさんの、姪御さんに朝４時40分に自宅まで来ていただき、新百合ヶ丘駅まで送って頂いた。ご迷惑をお掛けしたがKさんと姪御さんのご厚意に甘えることにした。５時15分に同駅を出発するリムジンバスに乗って６時半過ぎに羽田空港の出発ロビーに到着。MU756便は９時に離陸し、上海浦東空港に中国時間10時30分に着陸した。（以下中国時間で表示）つまり時差が１時間あるので２時間30分のフライトである。

上海で旅行社のガイドも加わり総勢15名のツアーとなった。本ツアーはここからすべてバスの旅で、まず長江を渡り南通に着いた後長江に沿って遡り揚州へ、揚州からまた長江を渡り鎮江、無錫そして上海に戻る左廻りのルートである。バスは12時半に出発し一路南通へ。１時間あまり走ったあたりで予定表には記載されてなかったが、「沙渓古鎮」という水郷古鎮に立ち寄った。上海、蘇州、杭州の周辺には、多くの水郷の町があるが近年外国人観光客が増えている。このエリアは、長江の運ぶ土砂が太古から長い年月堆積して形成されたため水路が網の目状に広がっている。周荘、烏鎮、同里ほど有名ではないが、この古鎮も味わいがあった。水郷は歴史的な建物があるわけでもなく、近代的に整備された町ではないが、生活の匂いが濃厚で昔の田舎のような佇まいが人の気持ちをゆったりさせるのだ。石畳の狭い通りには、あちこちにこの土地独特と思われる昔風のお菓子やら粽子（ちまき）を売っている。ガイドさんが粽子を買って配ってくれたのでそれを食べながら散策すると、開放感が満たされてくる。

古鎮の石橋で二胡をひく老人

友人とわき道に入ると、掘割に架かった真ん中が高く造られた石橋が見えて来る。このような石橋を見るたびに、よく重みで上の方から崩れて落ちないものだと思う。その下を荷物を積んだ小舟が過ぎ去っていく。橋の石段には老人が腰かけて二胡を弾いていた。この風景は一幅の絵画を見るようでカメラに収めた。老人の足元には瀬戸物の容器が置かれており、中に１元硬貨がたくさん入っていた。私も演奏して頂いたお礼に１元を入れた。舞台で聞く二胡もいいが、水郷古鎮で聞くのもいいものである。

集合時間が来たので皆バスに乗り出発した。バスの中で人民元に換金したい方は、１万円で520元という説明があり皆さん交換していた。ガイドさんが人民元をたくさん用意していたようだ。一昨年大連に行った時は640元、昨年成都に行った時、530元で毎年のように円安になっている。バスは夕方５時に「南通銀座花園大酒店」に到着した。チェックイン後６時から夕食になった。この旅は「グルメ」もセールスポイントの一つであるが、次から次へと美味しい料理が運ばれて皆さん大満足であった。料理の名前は殆ど分からなかったが、聞いてもよく理解できなかったと思う。

今夜は、遊覧船に乗って市内を流れる“濠河”の両岸の夜景観光である。濠河観光は街の名物である。游客中心（観光センター）で入手したパンフレットによると国家AAAAA級旅游景区とあり、第１級観光地のお墨付きをもらっている。「濠」の字は守ると言う意味があり、街を守る“お堀”ということのようだ。友人によると、この地域は中国国内で最も完全に保存されている“古代堀”の一つだそうだ。バスから降りて船着

濠河の夜景

き場に係留されている観光船に全員乗り込んだ。船には、専属の女性ガイドが乗っており、肌寒いので暖房が入っていた。つまり、部屋の中から外の景色を見るような造りになっていて、これなら雨の日でも寒い日でも関係なく景色を楽しめる。船は低いエンジン音を響かせながらゆっくりと岸を離れて行った。すぐ、ありとあらゆる色のネオンで彩られたいくつもの建物が次々と目に入ってきて、確かにとても美しい。そのうち「南通電視塔」というテレビ塔が見えてきた。全体が白色で上部にブルーの展望台が造ってある。私は中国各地一例えば北京、ハルピン、大連等たくさんのテレビ塔を見たが、今まで見た中でこの塔が一番美しいと感じた。デザインがスッキリして気品があるのだ。この塔を見ただけでも南通夜景観光に来た価値があるとさえ思った。上海の「東方明珠」は有名であるが、デザインがゴテゴテしていて印象的ではあるものの好きではない。

濠河風景区は、３平方キロ余りの広さであるが遊覧船は約50分かけて掘割を一周して戻ってくる。パンフレットを見ると、掘割の周囲には次に掲げる様に多くの記念館や公園があり、船から眺めることができるものもある。

「中国珠算博物館」、「中国審計博物館」、「南通博物館」、「南通濠河博物館」、「沈寿芸術館」、「南通蘭印花布博物館」等々、そして「南公園」、「南通盆景園」などである。このエリアは、千年以上の歴史と文化と景観が融合している地域なのだそうである。なかでも、目を引くのが「中国審計博物館」と「南通盆景園」である。前者は、審計とは“会計監査”のことであるが、会計監査の博物館は何を展示してあるのか全く想像がつかない。パンフレットには、「会計監査の3000年以上の発展の経過が展示されている」と中国語で書いてあるがよくわからない。「会計監査」という仕組みを作ったのは世界で中国が初めてだ、と言いたいのかもしれない。私は若いころ簿記を学んだが、その時に先生が、「ルカ・パチョーリというイタリアの数学者が15世紀に複式簿記を体系化し会計の発展に寄与した」と言われたことを思い出すが、会計と会計監査は別物と言いたいのであろうか。白髪三千丈がここでも顔を出している気がする。後者は、盆景とは盆栽のことだが、同じくパンフレットには「全国に知られた500年以上の樹齢の国家級の盆栽」と書いてあるが、日本の盆栽とはどのように異なるのか、中国の盆栽の歴史はいつ頃からなのか、興味深いがどちらも見学する時間がなかったのが残念である。上海から近い街なのでいつかまた来て見学したい。付言すると、南通市の特産品に蘭印花布がある。これは中国の伝統的な藍染め織物で、衣服、ストール、ハンカチ、傘など色々な用途に使われている。花布に関する歴史を紹介し、製品を展示してあるのが、前記の「南通蘭印花布博物館」であろう。日本にも「蘭印花布」のお店があるそうだ。

ところで船のガイドさんが、中国全土でも有数なハイレベルの学校である「南通中学」がこのエリアにある、と紹介されていた。南通市は、「中国近代化第一城」とも「基礎教育の郷」とも呼ばれている。ネットで見ると、清末に実業家・教育家であった〈張謇（ちょうけん）〉がこの街に全国初の師範学校、紡績学校、刺繍学校、盲学校、気象観測所などを設置し、中国の近代化に貢献したそうである。中国教育界では「高考（6月上旬に行われる全国統一大学入試）の結果は江蘇省を、江蘇省の高考の結果は南通市を見よ」との言葉があるという。高考で江蘇省は全国1位、その江蘇省内で南通市は省都・南京市や揚州、蘇州など相手にせず10年連続で1位なのだ。清華大学、北京大学に多くの合格者を出している。日本では南通市はあまり知られていない都市と思うが、もっと注目されていい都市であろう。中国人にとっては、常識かもしれないが。

最後に「南通市」の名前の由来であるが、ガイドによると「以前、南通市は通州と呼ばれていた。同じ名前の地名がもう一か所あったので、こちらを南通市に改めた」そうだ。

（続く）